孤立の村を巡回診療

AMDA活動報告

救える命があれば どこへでも

□11□

菅波 茂

グアテマラのハリケーン

沖縄支部・キューバと連携

十月二日から九日にかけて、グアテマラ共和国でハリケーン「スタン」による豪雨災害が発生した。国連報告によれば、死者・行方不明者は千五百十三人（うち死者六百六十九人）、被災者は四十七万四千九百二十八人に上った。

AMDAカナダ支部長のウイリアム医師からメールがあった。「医療従事者を一人待機させている。本部は医療チームを派遣するのか」と。即断を迫られ、こう返答せざるを得なかった。「本部はパキスタン北部地震被災者救援活動をスパール、バングラデシュ、インドネシアそしてパキスタン各AMDA支部と実施中。動員可能なコーディネーターは全員派遣しているので余力なし」

同月十二日、今度は国際協力機構（JICA）グアテマラ事務所長の三澤吉孝氏からメールが入った。「被災地在住の日本人から連絡が入っている。被災地では消化器伝染性疾患がはやっている。AMDAの医療チーム派遣は可能だろうか」と。三澤氏はJICA中国（広島県）での勤務経験がありAMDAをよく知っておられた。

「救える命があればどこへでも」のスローガンを泣かせてはいけない。すぐに沖縄支部長の大仲良一先生とホンジュラス支部に連絡をした。「グアテマラに医療チームを派遣したい。協力をお願いしたい」

十一月八日に沖縄支部からペルー出身で日系二世の渡久地宏文医師、七日にはホンジュラス支部から渡辺咲子看護師、コーディネーター一人、医師一人の合計四人が被災地に向かった。孤立が伝えられている西部のサン・マルコス県の標高三〇〇〇㍍から低地まで、七カ所の村で巡回診療を実施した。

渡久地医師の報告は生々しいものだった。「住民が避難している教会が土砂で埋もれ、道が豪雨で遮断されていた」「感冒などの呼吸器系疾患、下痢などの消化器系、皮膚疾患そして家族を亡くしたことによる精神後遺症の患者さんが多かった」「男性は少々のことでは治療に訪れないというマッチョ思想のために少なかった」「食事前や排便後に手を洗う習慣がなく、衛生教育の必要がある」

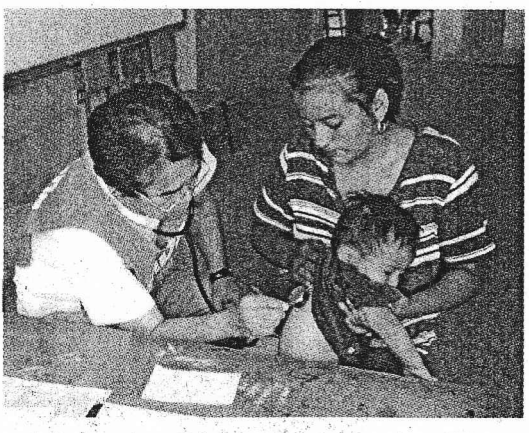
うれしかったのはキューバ医師団と診療活動を共にできたことだ。キューバ政府には海外の人道支援活動のために五千人の医療従事者がいる。一九九八年のハリケーン「ミッチ」がホンジュラスを襲った時に、同国大統領は「キューバ政府からの医師団は必要ない」と言明した。だが実際には、AMDA多国籍医師団が被災地で救援活動をするキューバ医師団と遭遇している。

今回もグアテマラ政府はキューバ医師団を受け入れていた。私自身もザンビアや東ティモールなどの発展途上国でキューバ医師団の活躍を見ている。最近も東京のキューバ大使館から世界の人道支援活動に関して、AMDAに連携の話があったばかりである。

AMDAインターナショナル、沖縄支部そしてキューバ医師団との連携によって、中南米の災害被災者救援活動が迅速、的確になり、より多くの人たちのお役に立てると思っている。パキスタン北部地震があっても沖縄支部に相談して、もっと早い段階で医療チームを派遣すべきだったと反省している。ただし、海外のJICA事務所と連携して災害救援活動を実施したのは初めてだった。これが良き前例になることを期待している。

AMDA（アジア医師連絡協議会）理事長

この連載は毎月第四日曜日に掲載します。



巡回診療に当たる渡久地宏文医師（左）＝15日、グアテマラ、サン・マルコス県（AMDA提供）